

私の文房四宝

◆ 第四回

加藤東陽先生
(高・大・一般 楷書A担当)

月刊「書写書道」手本揮毫者が愛用する「筆・墨・硯・紙」について、いつから使用している用具なのか、どうやって手に入れたのか、使い心地など、各先生の用具への思い入れを題材に連載しています。今回は、高・大・一般の「楷書A」ご担当の加藤東陽先生に、長年愛用している墨や硯、用紙についてご紹介いただきます。

唐墨との出会い

高校生の時に初めて「唐墨」（大好山水、金殿餘香、氣叶金蘭など）と出会い、強い衝撃を受けました。和墨の色しかなかった私にとって、唐墨は不思議な墨色でした。墨は無彩色ですが見る人の感情によって、多様な色を感じさせてくれました。「墨に五彩あり」と言われますが墨のびや光沢、潤枯、滲み、淡墨の色などがそれぞれ異なっており、原材料である煤や膠の種類などの関係から、墨にはさまざまな色調や性質があることを初めて知りました。

唐墨と出会った頃、鈴木翠軒翁の老荘思想や写真1 高校生の時から使っている墨「鐵齋」



「淡粧濃抹」（北宋・蘇東坡）などの言葉や作品に魅せられて、唐墨特有の淡墨の躍動に感銘を受けて以来、今も唐墨を使い続けています。

写真1の「鐵齋」は高校生の時から使用している墨で、残り少ないですが今も大事に使っています。

磨墨―発墨―「墨」と「硯」

磨墨（墨を磨ること）は古来、「子どもの力、或いは墨と手の重みくらいでゆっくり磨ると発墨（生きたよい磨墨液をつくること）にちょうどよい」と言われています。発墨がよければ墨ののびもよくなり、紙の繊維への浸透も増し、線や滲みも美しく、墨色の表現も冴えたものになります。

硯については、普段は墨によって羅紋硯や澄泥硯、歙州硯などを使い分けていますが、写真2の端溪石の太史硯（清代）の鋒鈍は細潤で古墨との相性もよく、磨墨、発墨も良好のため、「こそぞ」と言うときは必ず古墨と組み合わせ

写真2 太史硯（縦19.5 cm×横12 cm×高さ7 cm）



写真3 丸みがあり手になじみます



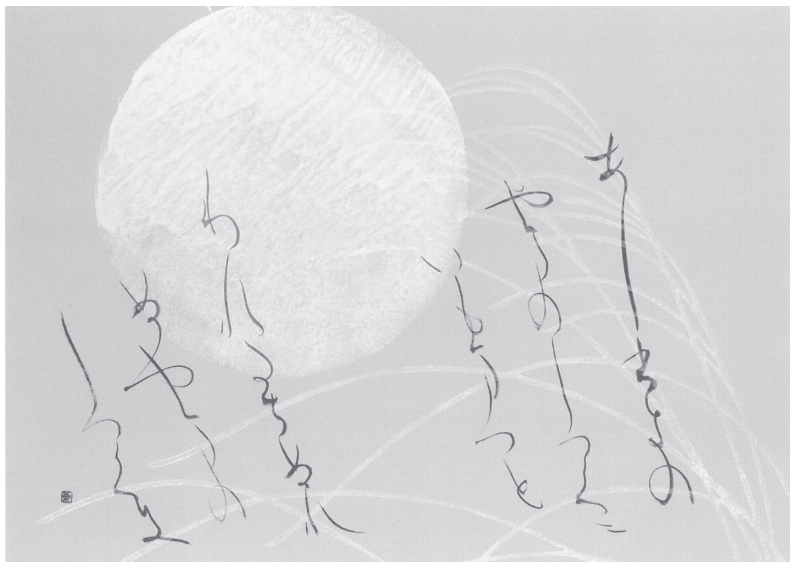
愛用しています。

なお、淡墨を用いるときは一度発墨させた濃い墨液を水で薄めて画箋紙に書くようにしています（作品Ⅰ）。こうすると、同じ淡墨でも、淡い中での強さや、変化の妙（滲み）など、その効果を一層強く表現できます。また、墨の形にはあまりこだわってはいませんが、写真3は『枕草子』に「墨はまるなる（丸くて品よいもの）」とあることに興味を持ってから使い始めた墨で、鮮やかな墨色と手になじんでいることから、長年愛用している古墨です。

作品Ⅰ 淡墨で画箋紙に滲みを強調しました
月輪 (66 cm × 35 cm)

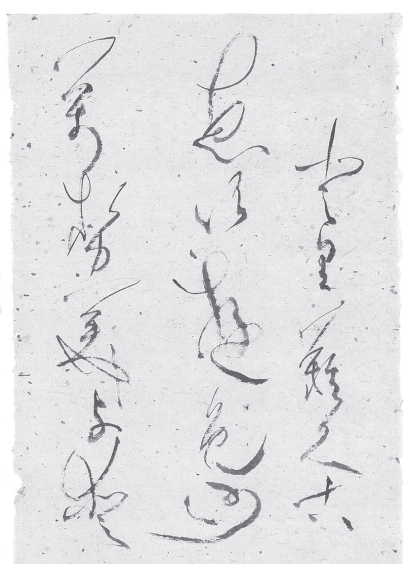


作品Ⅱ 料紙の下絵と「萬葉歌」との調和を意識しました (26 cm × 37 cm)



■ 釈文
あしひきのやまのしづくにいもまつと
われたちぬれぬやまのしづくに

作品Ⅲ 地元の和紙に「鳥啼歌」を書きました
(98 cm × 68 cm) × 3



■ 釈文
鳥啼く声す夢覚ませ 見よ明け渡る練を
空色染えて沖つ辺に 帆船群れるぬ露の中

料紙と細川紙

「料紙」とは、鳥の子紙や楮紙が原料の、藍、紫、緑、茶などの色で染められた紙です。種類も「染紙、雲母引き、雲紙、飛雲紙、蠟箋、裝飾紙」など、多種多様です。漢字や仮名の書などでは、装飾された紙と文字がよりよく調和して、和紙と文字が特有の美を生みます。特に、仮名は平安の頃よりさまざまな図柄の料紙に書かれてきました(作品Ⅱ)。

この作品は、蠟箋で全懐紙の下絵に相寄り、「萬葉歌」を散らし書きしたものです。多彩な種類の中から料紙を選び、それを使いこなすことは作品づくりの醍醐味でもあり、作品制作の上で重要な作業の一つだと思います。

また、作品Ⅲは近在の埼玉県小川町で50年前に生産された手漉き和紙(細川紙)に、隣町出身の歌人の坂本百次郎が明治36年に作詞した「鳥啼歌」を万葉仮名で一気呵成に書いたものです。細川紙は強靱な楮紙で淡黄色の明るい紙色と光沢があり、一枚一枚に微細な表情をもちます。かつて、細川紙の生産が盛んだった頃、和紙を天日で干す「板干し」の光景から「びっかり千両」という格言も広まりました。地元ゆかりの細川紙に「新いろは歌」と言われる鳥啼歌をいつか書いてみたいと、長年心にあたためており、30年ごしに書き上げました。

「筆妙墨華」と言うように、こうして改めて愛用する文房四宝(筆墨硯紙)を掘り起こして一つ一つに触れることは、時を忘れて楽しめる、至福の時間になりました。